臺 灣 總 督 府

中央研究所農業部彙報

第 百 八 號

臺灣に於て有望なる園藝作物

第 一 報

臺灣總督府中央研究所

昭 和 十 年 二 月

本彙報は本島に於ける園藝作物の中、當部にて試作せる結果其成績良好にして將來有望なる作物として採用し得べきものに就き其耕種概要を記述せるものにして、一般當事者の參考に資せんが爲之を印刷に附す。

昭和十年二月

臺灣總督府中央研究所農業部長

農學博士　澁谷紀三郎

臺灣總督府中央研究所 農業部彙報 第百八號

臺灣に於て有望なる園藝作物

第一報

目次

一 草苺「臺農苺」……1

二 成歡瓜……6

三 三池甘藍……11

四 タロー……13

五 マツシユルーム……16

臺灣に於て有望なる園藝作物*

第一報

技師　櫻井芳次郎

囑託　安倍輝吉

一、草苺「臺農苺」

本島に於て領臺後屢々草苺（學名 Fragaria L.）の種苗を内地より移入し各地にて栽培を試みたるものあれごも、多くは培養一、二年にして根絶し失敗に歸したり。之が主なる原因は夏季高温にして或は乾燥に過ぎ或は多濕に陷り氣象的要素の不良なる爲か、然らざれば病害及蟲害等により枯死根絶するに至りたるものゝ如し。されば本島の風土に適合せる良品種を選擇して强健なる苗を養成し本圃に於ける栽培管理に注意するこごは蓋し本島に於ける草苺栽培上緊急なることなり。農業部に於ては十數年來繼續し栽培保存したる草苺より、强健なる系統「臺農苺」を選出するを得たるを以て容易に本島平地に於ける草苺栽培を可能ならしむるに至れり。

*臺灣農事報　第三三九號別刷

臺 農 莓

臺農莓は之を内地の優良大粒種と比較する時は尙稍劣る所あれども、栽培の容易にして大量栽培に適し、收穫時期長く島内消費用としては充分其目的を達し得べし。猶當部に於ては多くの草莓品種を蒐集し鋭意研究中なるを以て更に優良種を選出し得べきを確信す。

(一) 品種 十數年前札幌莓系の母株を移入し其後繼續栽培して品種の維持に努め小數の殘存株より本種臺農莓を選出したり。此選出品種は繁殖力強くして本島夏季の氣候に耐え卽ち高温、乾燥或は多濕に對する抵抗性強く頗る强健なり。果は長倒卵形を呈し結果多く一期に引續き5—6果梗を出し稀に50—60果を着生することあり。果は稍小なれども摘果を適當に行ふ時は1果7—8g(2匁内外)に及ぶものあり。酸味稍多けれども砂糖及牛乳等を加へて生食するによく充分商品とするに足る。此外目下當部試驗中の86品種の中優良なるは邦產四季成莓、「ブランデワイン」「オリオンサンマー」「アリーエスト、オブ、オール」(一名加賀見莓)「クラークシードリング」等なり、

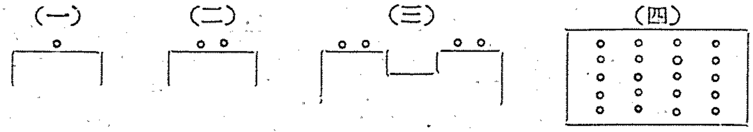
猶是等につきては今後繼續培養試驗の要あるものなり。

（二） 栽培法　草苺栽培上内地に於ける醱熱物を利用するフレーム栽培法或は石垣を應用する促成栽培法は、本島に在りては收支經濟上猶研究の餘地多きを以て玆には主として露地栽培につき要領を記せり。

土質—砂質壤土、壤土及埴質壤土等を可とす。埴質地にありては堆肥を多量に施用し土壤を膨軟ならしむべし。

栽植期—越夏せる走蔓（ランナー）を圃地に於て其儘培養し、本植用に供する場合は十月下旬乃至十一月中旬を可とす。走蔓を九月下旬乃至十月中旬に假値せるものは十一月乃至一月上旬迄に本植するを可とす。二、三月頃晩植せるものは開花時期遲れ結實期短く良果を得難し。

栽植距離—内地に於ては一度定植する時は數箇年間植替を行はざるものもあれど、本島に於ては毎年新植するの要あり。從て株間の距離を近くし密植するを可とす。栽植の方法は種々あれども（一）畦幅 45 cm（1尺5寸）株間 21 cm（7寸）卽ち10 a（約1反）當 10,200株植（二）畦幅 60cm（2尺）二列植株間 30 cm（1尺）卽ち10 a 當 10,800 株植とすることあり、又（三）埴質地又は排水良好ならざる土地に於ては二畦包畦高畦とし、幅は畦溝共 1.8 m（6尺）にして二列植株間 30 cm（1尺）とするときは 10 a 當 7,200 株を栽植し得べし。若し（四）高畦に横植となす場合は、畦の幅 1.5 m（5尺）にして溝幅 30 cm（1尺）に取り列間 30 cm（1尺）株間 21 cm（7寸）とす、然るときは 10 a 當 12,600株植となる。



整地及定植—畑地を深耕し叮寧に土塊を碎き縱畦の場合は畦幅に從ひ 45 cm（1尺5寸）又は60 cm（2尺）毎に深さ 18cm（6寸）内外の溝を切り、之に元肥を施し土壤と能く混合し覆土して高さ 6 cm（2寸）内外の小畦を作る、小畦の中央部に一列又は二列に苗を定植す、二列の場合は千鳥形に植すべし。廣畦として横植とする場合は前記の如く畦を作り元肥を撒布し叮寧に切り込

み整地して定植す、定植2—3時間前苗床に灌水して根に土の附着を容易ならしめ1株宛抜き採り豫定の位置に栽植す、而して根元は少しく壓し定植を終る。定植後は充分灌水し尚1週間内外毎夕灌水して活着を助く。

肥料—苗の養成に於けると異り本圃に於て若し肥料の不足を來す時は開花結實及品質に及ぼす關係頗る大なり、本島に於ては結實期間長きを以て自ら肥料の施用量を多くする必要あり。

肥料の種類及其施用量等に關しては猶試驗中に屬すれども大約次の標準に依るを可とす(10 a 當施用量)

肥料名	元肥	追肥						計
		1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
堆肥	2,250	—	—	—	—	—	—	2,250
人糞尿	750	—	—	—	—	—	—	750
鰊粕又は油粕	40	—	—	40	—	40	—	120
過燐酸石灰	75	—	—	—	—	—	—	75
木灰	75	—	—	—	—	—	—	75
硫酸アンモン	—	10	10	—	10	—	10	40
施用期	定植前	十一月又は十二月	一月中旬	二月上旬	二月下旬	三月中旬	四月上旬	

敷藁—活着後降雨による泥跳を防ぐ爲め株元に藁、籾殻等を敷くを普通とす。然れども結果期に多濕なる地方に於ては之が爲め蛞蝓(ナメクジ)の發生を招き屢々果を喰害せらるゝことあるを以て、徑3cm(1寸)内外の小石又は瓦の破片等を株元に列べ敷藁に替ふることあり。

除草—生育中3—4回除草をなし、苺の生育を助くべし。

摘果—花梗の發生は苗の栽植時期により異なる、概して1年を通し3—4回の結果期を有し一期に1株より引續き3—4本又は5—6本の花梗を發生し之が完熟後株の勢力を恢復し第二期の開花を始むるものゝ如し。斯くして十月又は十一月に栽植すれば六月に收穫を終る。花梗の發生と其結果とを自然に放任する時は品種により1株より花梗5—6本1花梗に約10果を算する

ことあり。斯の如く多數の果を結ばしむる時は果小にして良品を得ること能はず。故に良果を收めんとせば形狀正しく成長の見込あるもの1花梗につき2果内外を殘し他は悉く摘除するを可とす。

防風—冬季生育中季節風强く之に伴ふ降雨及冷氣を催す地方に於ては適宜防風裝置をなすを要す。

袋掛—特に良大果を得んとせば果の小指頭大となりたるとき、1果梗宛パラフィン紙又は新聞紙にて作れる袋を掛け果の損傷を防ぐべし。

病蟲害防除

1. 生育中2—3回石灰ボールド液を撒布すべし。
2. 根部病害により株の枯死せるものある時は根元の土と共に速に除去すべし。
3. 結果時期に於て株元に蝸牛（カタツムリ）、蛞蝓（ナメクヂ）の發生を見るときは直に捕殺すべし。

收穫—苺果は品種、果の大小、開花時期等により異なれども開花後30日乃至50—60日にして成熟するものなるを以て、果の3分の2内外着色せる時收穫す。收穫は毎日早朝又は夕刻に行ひ果の損傷せざる樣果梗を附し1果宛摘み採り荷造を行ふものとす。

（三） 苗の養成法　本法に就ては猶未だ研究中に屬すれども、從來の試驗成績に依れば本島に於ては夏季の高溫時には專ら母株及苗の枯死を防止し、是等を保持する程度に止め、初秋より培養に努め移植用に供するを可とす。夏季苗の生育を保持するには次の方法に依るを可とす。

A. 夏季稍冷涼なる高地に於て育苗を行ふ(高地養成法)。

B. 十一月、十二月頃苗の小なるものを假植し置き、三、四月頃特に之を採苗用母株として本植し簇出する花梗を摘除し結果を避け之より發生せる走蔓（ランナー）を越夏せしめ苗となすべし(苗專門養成法)。

C. 十月乃至一月頃苗を本植し充分結實せしめ、五、六月以降發生せる走蔓を保護し苗となす(普通法)。

以上の内A法は特殊の位置にして普通之に據ること能はざれども、B法及

C法は一般に實行し得る方法なり。猶是等を行ふ場合特に注意すべき事項を次に掲ぐ。

1. 夏期中肥料特に窒素質肥料の使用を避け草苺畑を殆ど無肥料狀態に置き發育を促さざること。

2. 普通法に由る果實採收後苗の養成をなすには五、六月頃の走蔓發生時までに圃地には特に窒素成分の大部分が消耗し居る樣肥料の配合及施用法に注意すること、夏期圃地に窒素其他の肥料養分過多に殘存する時は徒長罹病して枯死するもの續出するに至るべし。

3. 苗養成中圃地の乾燥に失することなき樣朝夕充分灌水して常に適當の濕氣を保たしむること、草苺の根は淺根性なるを以て旱害に罹り易し、されば灌漑し易き畑地或は水田を草苺畑とするを便とす。

4. 三月頃敷藁又は之に換ふべき被覆物をなすこと、但敷藁を晩期に多くなすは走蔓の生育を害す。

5. 病害豫防のため株元に木灰を撒布し猶生育中2—3回石灰ボールド液を撒布すること。

6. 蚜蟲其他の害蟲を認めたる時は直ちに驅除すべし。

7. 九、十月頃氣溫稍低下し苗より走蔓の發生せるものは之を除去し苗の生育充實を圖ること。

8. 苗養成の假植床には充分肥料を施し猶本植までに1—2回追肥を施し生育を促すこと。

二、成　歡　瓜

主產地及品種の性狀　成歡瓜は甜瓜(學名 Cucumis Melo, L.)の一品種にして支那種系統に屬す。本種の主產地は朝鮮中淸南道成歡地方にして滿洲地方に於て栽培せらるゝ哈噗酥(ハーマースー)は本種と同一品種なり。本種は他の甜瓜に比して草勢頗る强健にして葉は稍濃綠色を呈す、蔕形は長卵形にして果頂部には隆起せる圓形の臍あり外皮には綠色濃淡の縱縞あり且虎斑狀を呈し表皮は稍粗面なり、1果の重量550g內外あり肉色は外皮に接したる部分は淡綠色なれ

ども其他は黄樺色を呈す、肉質脆軟甘味多く香氣稍高くマスクメロンに類似し味良好なるを以て之が栽培は將來有望なるべし。

栽培時期 甜瓜は温暖乾燥を好む作物なるを以て本島北部地方に於ては冬及早春の季節を除く期間に於て生育良好なり、就中春季二月下旬乃至三月上旬播種し六、七月收穫し或は夏季七月下旬乃至八月上旬播種し十月中旬乃至十一月上旬收穫するを可とす、又中南部地方に於ては春季二月前後播種し五、六月に收穫し或は秋季(雨期後八、九月以後)播種し冬春乾燥期中に於て收穫するを可とす。

成　歡　瓜

栽培法 苗仕立一本種の栽培には苗を仕立て定植する法と直播する法の2法あり。本島北部地方に於て春播適期の二月には氣温猶稍低く屢々降雨ありて常に濕潤なるを以て苗仕立法に由るを可とし、其他に於ては直播するを可とす。苗床は何れに於ても南西に面し東北面には防風裝置を設けて日當り良く温暖なる場所を選ぶべし。苗床用土は肥土3.砂質壤土5.燒土2位の割合とし之に適宜施肥して3—4粒を點播とし又は條播とす、猶集約なる方法は徑、高さ共に10cm内外の素燒植木鉢又は粘土製植木鉢を用ひ之に用土を充

し床地に並列し1鉢3—4粒宛を播種し發芽後間引きて1鉢2本とし本葉2—3葉の時之を本圃に定植す。

本圃—栽培地の土質は排水良好なる砂質壤土を最も良とす、稍埴質の土壤にありては高畦とし土地の乾燥を圖るべし。

整地の方法は畑地を深耕し土塊を砕き砂質壤土地にありては畦上1.5 m 畦溝20 cm 稍埴質なる土地にありては畦上1.2 m 畦溝60 cm の高畦を作り畦の中央に深さ18cm 内外の溝を掘りて之に元肥を施し土壤と良く混和し覆土し高畦を作り株間60 cm 毎に徑20 cm 内外の圓形揚床を作り之に定植す。

直播—本圃に於ける圓形揚床の中央に液肥を施し之に5—6粒の種子を下し燒土を以て覆土す。

肥料 10 a 當施肥量

肥料名	元肥	追肥					計
		第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
堆肥	1,500	—	—	—	—	—	1,500
大豆粕	300	—	—	—	—	—	300
過燐酸石灰	20	—	—	—	—	—	20
人糞尿	375	—	—	375	375	375	1,500
鰊粕	—	4	6	15	15	20	60

元肥は定植前に施し追肥第一回は定植後1週間目位に株の一邊に淺き溝形を附して之に施し覆土す。第二回は其後1週間を經て他の一邊に同樣の方法にて施し第三回は其後2週間を經て株の廻りに施用す。第四回は株と株との中間に淺き溝を掘りて之に施し第五回は其後2—3週間を經、蔓の50 cm 内外に伸びたるとき畦の上部兩側に溝を掘りて施し同時に中耕培土を行ひ畦を蒲鉾狀の高畦となす。但追肥施用期は其生育狀況により斟酌するものとす。

管理 間引—直播せるものは發芽後生育順調にして子葉正しく整へるもの1株3本を殘し他は之を除去し本葉3葉を生じたるとき猶1本を除去し2本とし1株2本立のものは此2本を生育せしむ、1株1本立のものは生育強剛

にして摘心後の生育狀態の整へるもの丶みを殘し他を剪除す、直播法に依らず移植せるものも之に準じて間引きを行ふ。

整枝及摘心―甜瓜は親蔓に雌花を着生するこ乙晩く且稀なれども子蔓以上の側枝には各枝の第一葉目又は第二葉目に雌花を發生するものなれば、親蔓は早く摘心し子蔓及孫蔓の發生を早むるこ乙肝要なり、故に之が摘心の有無巧拙は甜瓜栽培の秘訣こも稱すべく最も必要なる作業なりこす。

今農業部に於ける摘心法を揭ぐれば次の如し。

1株1本立法にありては本葉5葉を生ぜしこき4葉を殘して摘心し、4枝を發生せしめ、此子蔓4枝を主枝こし四方に伸長せしむ。之より發生せる孫蔓の第一葉目又は二葉目に結果せしめ結果せるものは其先端1葉を殘して摘心す。而して4本の主枝は50 cm 内外にて摘心す。猶親蔓の基部其他より發生せる側芽は全部之を除去し氣通を計る。病蟲害其他により生育中障碍多きを豫想せる場合は1株に2本以上の母本を殘すこ乙あり、此場合は1本の母本より發生せしむべき結果主枝の數を減じ、1株より發生せしむべき結果主枝を限定して生育せしめ蔓の繁茂を中庸に保たしむべし。

敷藁―莖葉の汚損を防ぎ且土地の乾燥を防ぐ目的を以て圃地に敷藁をなす、敷藁は初め株元に切藁を敷き、後蔓の伸長に伴ひ中耕土寄の際2―3回之を行ふ。

花粉媒助―雌花開花を始むれば每朝花粉の媒助を行ひ結實を助くべし。

灌水―苗の移植當時は勿論其他の時に於ても土地の乾燥甚しき場合は朝夕灌水して常に適當の水濕を保たしむべし。

病 蟲 害

病害―成歡瓜は他の甜瓜に比し草勢强健にして栽培易容なれども甜瓜粉病 (Sphaerotheca fuliginea (schl.) Sawada.) 甜瓜露菌病 (Peronoplasmopara Culensis (B. et. C.) Clint) 根腐れ等發生し被害を蒙るを以て注意すべし。之が一般的防除法を揭ぐれば次の如し。

1. 栽培地の土壤は砂質壤土を選び常に排水に注意すべし
2. 生育中硫化カリ液、石灰ボールド液(八、八式)等を數回撒布すべし。
3. 罹病莖葉は速かに除去すべし。

害蟲—甜瓜の害蟲中主なるものは「ウリハムシ」「タイワンクロウリハムシ」「タイワンオホコホロギ」「タマナヤガ」「ワタアブラムシ」「ウリノメイガ」「ウリミバヘ」等にして就中「ウリハムシ」「ワタアブラムシ」「ウリミバヘ」の被害最も多きが如し。是等に對する一般的防除法を擧ぐれば次の如し。

1. 防蟲網使用—「ウリハムシ」其他の襲來を防ぐため木綿網製徑高さ共に30 cm 内外の蟲除網を被ふ、網は夕刻除去し早朝覆ふを可とす。1枚の價格4—5錢にて3—4回栽培の使用に堪ふるが如し。

2. 根元に除蟲菊粉撒布—根に「ウリハムシ」の幼蟲侵入し果の成熟前蔓を枯死せしむること多きを以て蟲除網使用後2—3回根邊に除蟲菊粉末1株當2—3 g を撒布し成蟲の根邊產卵を防ぐべし。「ナフタリン」粉末少量を根邊に撒布するも前同樣の效果を齎すと稱せらる。

3. 根邊に毛髮纏繞—防蟲網を使用せず「ウリハムシ」の防除をなすには種々の方法あるべきも、女の頭髮「スキゲ」の廢物又は之に類するもの（棕梠の毛其他）を幼植物及蔓の根邊に纏繞し置く時は「ウリハムシ」の之に近寄るもの少く若し毛内に這ひ入りたるものは容易に之を捕殺驅除することを得べし。

4. 捕蟲網使用—生育中殊に植物の幼時「ウリハムシ」の被害多きを以て捕蟲網を用ひ捕殺すべし。

5. 驅蟲劑撒布—「アブラムシ」其他害蟲驅除として生育中數回除蟲菊石鹼合劑、デリス劑、硫酸ニコチン等を撒布すべし。

6. 袋掛—「ウリミバヘ」其他果實に被害を與ふる害蟲多き場合は開花後着果確實と認めたる時、幅15 cm 長さ20 cm 内外の紙袋（新聞紙其他）を掛け果の損傷を防ぐべし。

收穫 果は開花後35日内外にて成熟す、成熟の徵候は外皮全體淡黃色を帶び稍香氣を發するを以て此時期を逸せず收穫すべし。

試作成績 中央研究所農業部に於ける昭和九年度の試作成績を揭ぐれば次の如し。

播種期　　昭和九年八月七日（水稻跡作直播）

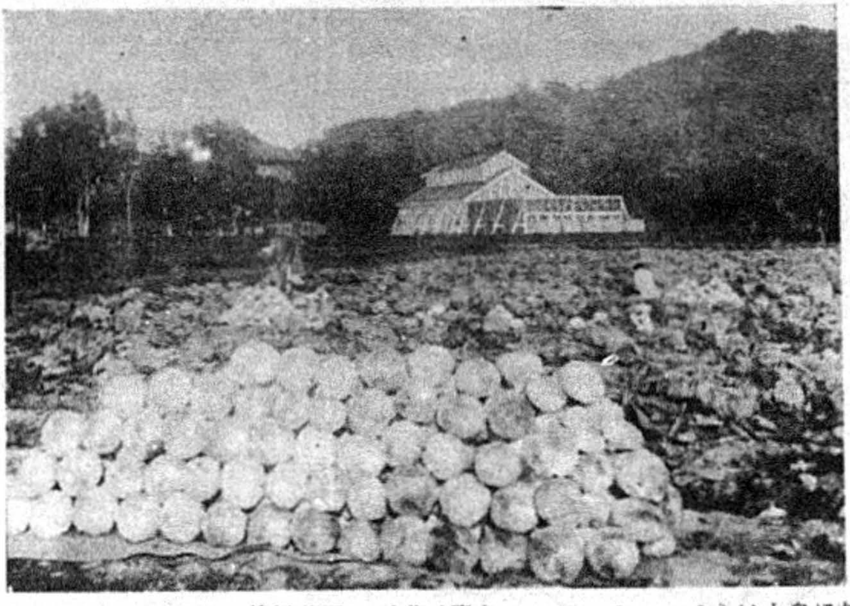
畦幅株間	襲上 1.2 m 畦溝 60 cm 株間 60 cm
一株本數	間引きて1本こす
開 花 始	九月三日、成熟期 十月八日、收穫期 十月八日乃至十月二十八日
10 a 當收量	1,518 kg 2,783箇
一果重量	最大 1,060 g 平均 549 g

風味—本島にて近年栽培せらるゝ金甜瓜及其他の甜瓜より風味良好なり。

三、三 池 甘 藍

產地 三池甘藍には早生及中生の2品種あり。本記述に於ては三池中生種に就き記載す。本種はサクセッション種より淘汰選擇せる品種にして福岡縣三池郡地方は其主產地なり。同地方に於ける採種々子は福岡縣廳農務課內蔬菜採種組合聯合會より販賣せらる。又別に横濱植木株式會社及其他の種苗店に於ても販賣し居るが如し。

三池中生甘藍 10 a 當收量 6,000 kg



本島に於ける甘藍の栽培状況 甘藍(學名 Brassica oleracea L.)は本島に於ては主として晚秋より翌年春季迄の比較的高温ならざる期間に栽培せられ、

猶此前後期にも多少生產せらる。全島に於ける栽培狀況は年々大なる變動なく栽培面積1,700甲歩生產高4,500萬斤內外なり。生產品の多くは島內にて消費せらるゝも內地及鮮滿地方の生產時期と多少異るため移輸出用に適し、本島に於ける將來有望なる蔬菜の一たり。

栽培時期　從來本島に於ける甘藍の栽培時期は七月上旬乃至十月下旬に播種し十一月上旬乃至五月上旬に收穫するを普通とす。然るに三池中生甘藍は從來のものに比し早期出荷及晚期出荷用の栽培に適し、早植せるものは約半箇月早く十月中下旬より收穫を始め、晚植せるものは1箇月以上遲く收穫して六月中下旬市場品薄の際に收穫し出荷することを得。卽ち本種は元來は中生種なれども本島にては實驗上早生及晚生甘藍として栽培すべく、長期に亙り生產し葉肉軟質にして結球充實し品質優良なり。

本島に於て栽培せらるゝ甘藍及三池中生甘藍の栽培時期を表示すれば次の如し。

		播種期	移植期	收穫期	主なる品種及10a當收量	備考
從來品種	早出栽培	自6月下旬 至8月上旬	自8月上旬 至9月上旬	自11月上旬 至12月上旬	臺灣種 自2,000斤 至5,000	臺灣種は元支那種を本島に於て採種せるものにして早生種となり擡苔すること早し
	普通栽培	自8月中旬 至9月下旬	自9月中旬 至11月上旬	自12月中旬 至3月下旬	臺灣種 自3,000 至5,000 支那種 自3,000 至5,000 サクセッション 自2,000 至3,000	直輸入支那種は稍晚生にして球太く結球容易球扁圓にして濃綠色本島にて採種することを得
	晚出栽培	自10月上旬 至11月下旬	自11月中旬 至1月中旬	自4月上旬 至5月上旬	支那種 自2,000 至3,000 サクセッション 自1,500 至2,500	サクセッションは前2品種に比し、球小なるも品質良好晚生にして本島に於て擡苔することなきを以て圃場に永く置くことを得
三池中生	早出栽培	自6月下旬 至8月上旬	自8月上旬 至9月上旬	自10月中旬 至12月上旬	三池中生 自2,000 至4,000	球の太さ中位、品質良好、收量多きを以て有利なる品種なり
	晚出栽培	自11月中旬 至1月下旬	自12月下旬 至3月中旬	自4月上旬 至6月下旬	三池中生 自3,000 至6,000	

耕種概要

苗床　條播又は撒播(薄播を可とす)

假植　特に假植の必要を認めざるも間引苗は之を假植し、生長せしめて後定植す。

畦幅　1.5m(5尺)の畦に二條植又は75cm(2尺5寸)

株間　45cm(1尺5寸)

肥料　(10a當普通施用量)

元肥　3,000kg　大豆粕 100kg　人糞尿 500kg　過燐酸石灰 30kg

追肥　人糞尿 1,500kg(3—4回に分施)但本種は普通施用量に比し施用肥料多きを可とす。

其他　一般栽培に準ず(臺灣農家便覽參照)

四、タ　ロ　ー (Taro)

タロー(學名 Xanthosoma violaceum Schot.)は南洋地方の原產にして莖葉其他の狀態里芋に似たるも里芋に比し葉の切目深く葉柄に達し葉を破るときは乳白狀の汁を出す、草丈高く2m内外に達し葉柄太く子芋は大にして稍長卵形をなし煮食用に適し親芋よりの新芽は之を軟白して芽芋となし、葉は豚の飼料となすことを得。

氣候及土質　性强健にして温暖なる氣候を好み本島に於ては殆ど周年之れが栽培に適せり。夏季高温多濕なる時に於て特に生育良好なり。本種は種々の土壤によく生育するも有機物に富みたる壤土又は砂質壤土を最適土とす。

品　　種

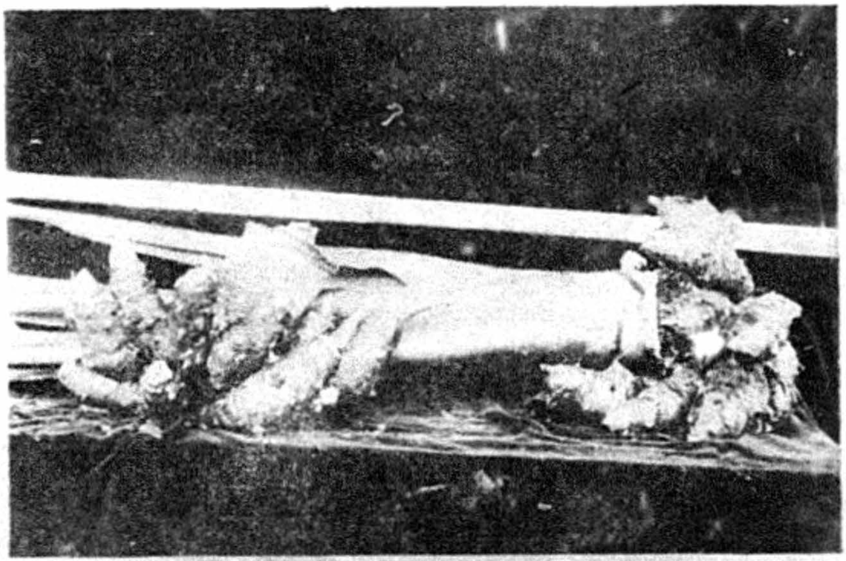
青莖種—芽、葉柄葉身共に綠色を呈し子芋を生ずること多し、子芋の食味は里芋に類似し肉質は粉質にして味良好なり。

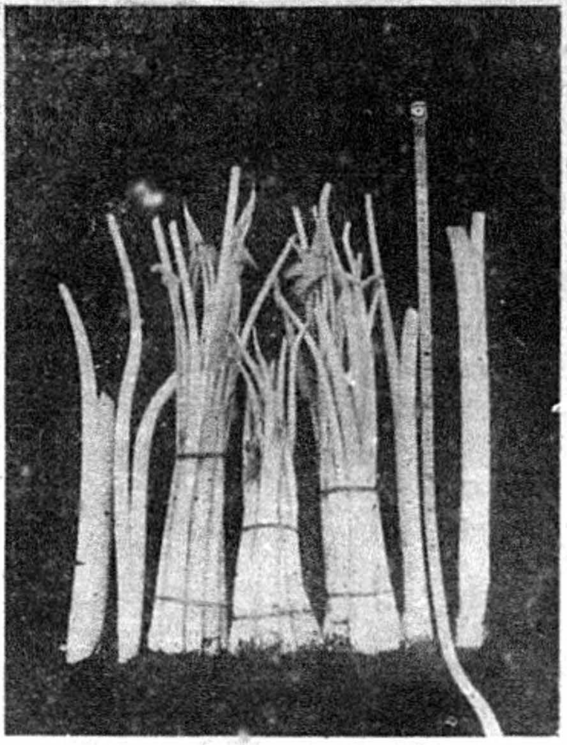
紫莖種—芽、葉柄、葉脈共、稍濃紫色を呈す。其他は前種と大差なきも收量稍少し。

栽培法

整地及栽植—畑地を深耕し叮嚀に土塊を碎き畦幅90cmとし其中央に深さ20cm内外の溝を掘り元肥を施し之に覆土、株間45cm毎に種芋1箇宛を栽

タ　ロ　ー





軟白せるタロー

植す。

種芋—種芋は中形にして1箇重量100 g 内外のものを用ふ。大なる種芋を用ふる時は小なるものに比し生育良好にして收量多し。種芋不足の場合には大なる子芋を2—3箇に切斷して用ふ。

肥料10 a 當施用量

肥料名	元肥	追肥			計	所含三要素量		
		第一回	第二回	第三回		窒素	燐酸	加里
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
堆肥	1,500	—	—	—	1,500	8.700	4.500	7.500
人糞尿	—	375	375	375	1,125	6.413	1.463	3.038
大豆粕	56	—	—	—	56	3.634	0.684	1.218
過燐酸石灰	22	—	—	—	22	—	3.300	—
計						18.747	9.947	11.756

元肥は栽植直前に施し、追肥は栽植後2箇月を隔て株間及畦の兩側に施用す。

管理 各追肥施用の際中耕除草及培土を行ひ草丈1 m 内外に伸長せし時畦間溝中に敷藁をなし畑地の乾燥を防ぎ、尙夏季乾天持續の場合は時々灌水して生育を助くべし。

收穫 栽植後10箇月内外にして子芋肥大し1箇200 g 内外となりたる時掘り取り親芋及子芋に分つ。子芋は煮食用とし親芋は芽芋栽培用に供せらる。されば五、六月の頃栽植せしものは翌年三、四月以後市場に於て里芋品薄の時期に出荷し得るものなり。子芋10 a 當收量5,000 kg 内外なり。

芽芋栽培 芽芋は芋の新芽を軟白せるものなり。小芋を用ひて軟白せる根の附着せるものを根芋と稱し、親芋を用ひて大なる新芽を軟白せるものを「ズイキ」と稱することあれど共に芽芋と稱すべし。

芽芋の栽培は低温時にありては特に軟化室或は軟化床等により發熱物を使用して良品を生産し得るも、本島に於てタローは周年發育するを以て發熱材料を用ひず單に暗所に於て生長せしむることにより軟化を行ひ得るものなり。種芋には親芋及子芋を共に使用し得るも親芋を用ふれば生育殊に良好にして且收量多きを以て有利なり。

軟化場所—古箱、藁小屋、堆肥場の一部等を利用し、光線を遮斷し内部を暗黑にすることを第一の條件とす。藁小屋は内部の醱るゝこと少きを以て軟化場所としては最良なり。

用土　栽培用土には苗床用肥土又は其他の肥土を用ひ之に充分腐熟せる堆肥(土糞を適當とす)を等量に混じ約10cmの厚さに敷く、其上に種芋を並列し芋の間に用土を充分塡充し尙上部に6cm内外を覆土す。三、四月頃栽植し適度に灌水し置く時は約2箇月後に30—40cmの長大なる芽芋を收穫し得るものなり。爾後收穫の回數を重ぬるに從ひ芽芋の大さは減ずるも約5箇月間に亙り十數回の收穫を得べし。

昭和八年度に於ける農業部タロー軟化栽培成績を擧ぐれば次の如し。

軟化室—長さ幅共に2mの藁小屋を用ふ。

種芋—タロー靑莖種親芋1a當400kgを用ふ。

栽植期—昭和八年三月二十日

收穫期—昭和八年五月十八日乃至同年十月四日

收量—1a當1,962kg　　60,753本

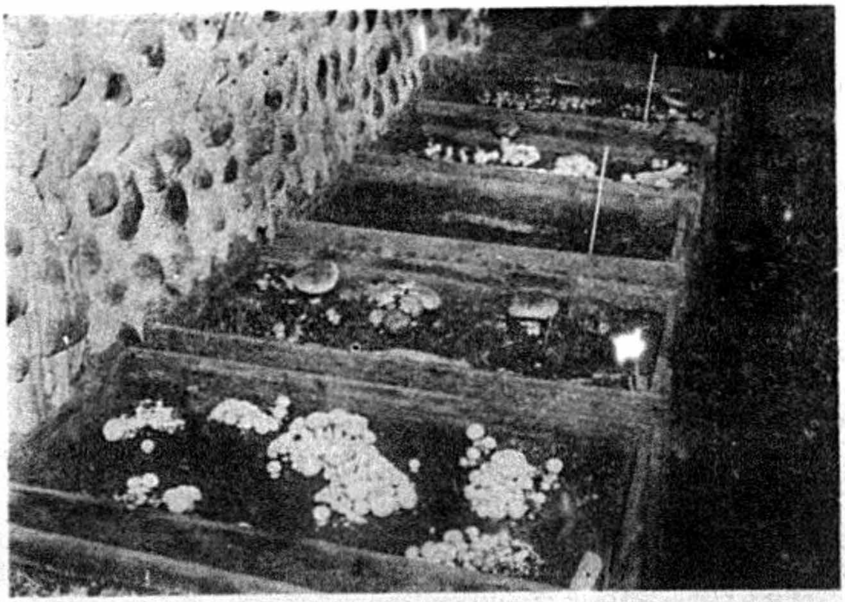
前記の外更に簡單なる軟化法を示せば次の如し。

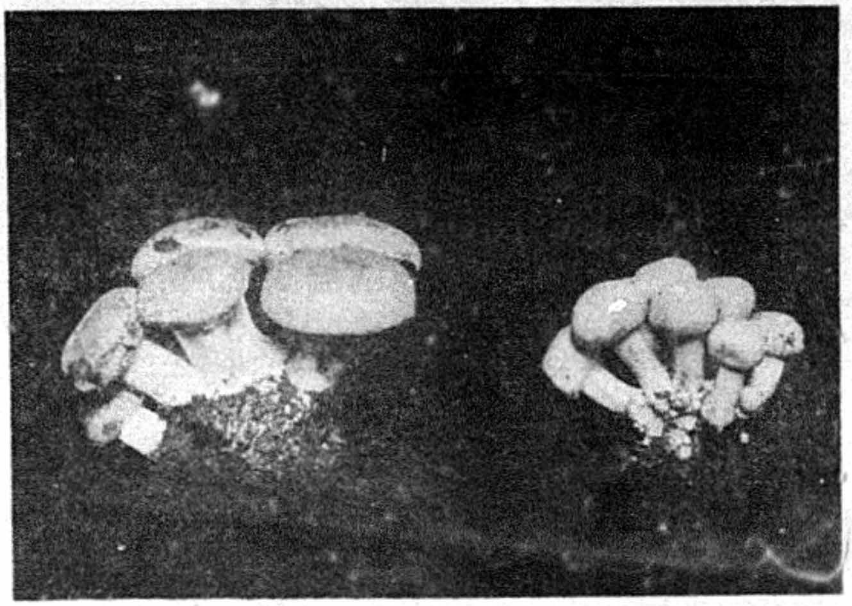
冷床、藁圍床等の内部に肥土を90cm内外の厚さに敷き之に種芋を栽植す。而して其上に籾殼、切藁又は厩肥等を約50cmの厚さに置き、嫩芽伸長して40cm内外に伸長せしむる收穫す。斯くて1箇月の間に約3回づゝに3—4箇月間引續き收穫し得らるゝものなり。

五、マッシユルーム

マッシユルーム英名(Mushroom)又はシャンピニヨン佛名(Champignon)は、本邦にて俗に洋菌又は西洋松茸と稱することあり。マッシユルームの學名は Psalliota Campestris (L.) Fr. (Agaricus Campestris L.)(ハラ茸の一種)にして有機物に富める土壤又は厩肥床等に能く生育す。而して其生育狀態は床中に白色根毛狀の菌糸を生じ、時期の至るや菌糸は床上面に球形の幼蕈(ピンヘッド)を生じ次第に生長して傘狀に開く、其柄部を菌柄と稱し傘狀部を菌傘と云ふ。菌類の生殖體を成す所とす。

マッシュルーム





來歷　マッシュルーム栽培の發祥地は佛國パリー附近なるが如く、初め之が栽培せられし當時は其繁殖用の種菌は牧場、厩舍及堆肥舍等より自生菌糸を採收し來りしものなりしが、西歷1830年頃より歐洲に於て種菌を培養し繁殖用に供するに至り急激なる進歩をなし、各地に於て栽培せらるゝに至れり。現今栽培の最も盛なるは英、佛、米國なれども世界各地に廣く栽培せられ、需要甚だ多し。我國に於ては久しく新宿御苑に於て栽培せられたれども未だ一般に普及するに至らず、漸く大正十年に及び京都の森本彥三郎氏は之が栽培に成功して自己培養の種菌を廣く販賣し、又農林省園藝試驗場其他に於ても之が試驗研究の結果一般に紹介せられ、今や全國各地に栽培せらるるに至れり。

本島に在りては、農業部に於てマッシュルームの栽培を研究し昭和五年より要領を得るに至れり。爾來試作を累ぬると同時に當業者に紹介して昭和七年より多少生產品を臺北市場に出すに至れり。本種は以上の如く漸次普及しつゝあるものにして有望なる食用蕈なり。

品種　各地に於て多年栽培中自ら變種を生じ其數多きを認むれども、當部に於て栽培する品種を擧ぐれば次の如し。

1. 「ホワイト」「アラスカ」系に屬し、白色を呈し、小形又は中形の茸を多產し香氣優良なり。比較的低温にても發育良好なるが如し。

2. 「クリーム」「コロンビヤ」系に屬し、クリーム色を呈し、稍大形なれども收量少し。

3. 「ブラウン」「ボヘミヤ」系に屬し、褐色又は濃褐色を呈し、中形又は大形の茸を生ず。性强健にして栽培し易く豐產なり。汁物となす時少しく着色するを缺點とす。汁物以外の料理に於ては色澤其他松茸に似たり。

栽培時期　マッシュルームは高温を忌み攝氏10度乃至20度內外にて發育良好にして32—33度以上に及べば病害のため腐敗すること多し。故に本島に於ては十月乃至四月迄を栽培適期とす。播種後50—60日にて蕈を發生し、其後採收期間60日內外なるを以て1作の栽培は凡そ120日に亙る故に十月中旬栽培に着手する時は十二月中旬より採收を始め二月下旬收穫を終る。又二月

上、中旬播種せしものは四月上、中旬に至り高温の爲、收穫中期に於て發病腐敗し栽培を終る。

栽培室 マッシュルーム栽培の適所は氣通充分ならず外氣の影響少き場所を可とす。故に鑛坑、鐵道の不要隧道、地下室等を利用することあり。

四圍土角作りの本島人家屋、堆肥場等に於ても亦之が栽培に適す。マッシュルームは光線を忌むものとして、その環境を特に暗くせる設備の中にて栽培せらるゝを普通とすれど、小規模の培養の際には麥酒箱等の小箱を用ひて之を緣下、床下又は物置小屋等に置き强き光線の當らざるやうせば能く栽培し得るものなり。

菌床材料 菌床材料は主として厩肥を使用す。本島にては特に馬匹の排泄物より得るものなることを注意するを要す。此厩肥は敷藁の種類により菌床として適不適あり、最も良好なるは燕麥、ライ麥等の稿稈にして稻藁之に次ぎ乾草、生草等を材料とせる厩肥は適當ならざるが如し。厩肥中馬糞の割合は普通敷藁の3分の1以上なるべく、馬糞の量多きを可とし從て馬糞のみを用ふる時は成績最も良好なり。

牛糞は從來種苗製造用となし又馬糞、稻藁等と共に用ふ。牛糞は栽培用として馬糞に及ばざれども、試驗の結果牛糞床1 m² につき硫安 500 g を混合し馬糞に劣らざる成績を擧げ得たり。

菌床材料の醱酵法 菌床材料は詰込前之を醱酵せしめて後使用するものにして、材料を均質ならしむるため堆肥舍に於て普通幅1 m 乃至 1.2 m (3.4尺) 高さ 60 cm 乃至 1 m 內外の長方形に積み、4—5日にして1回の切返を行ひ4—5回之を繰返せば之を完成するを普通とす。故に菌床の醱酵には1箇月內外を要するを以て詰込時期を推定し本作業を開始せざるべからず。切返の方法は各面共に灌水して外部を內部に上部を下部に反轉すべし。過度の醱酵は之を防ぎ溫度漸次下降し攝氏50度內外となり敷藁が一樣に褐色を呈して最早や厩肥特有の臭氣を有せざるに至りたる時を適度とす。急激なる乾燥を防ぐため約2割內外の土を混ずるを可とすることあり。灌水に用ふる水は馬尿、漏液を以てするときは成績良好なるが如し。而して水濕の程度は固く握り締

むるも餘液滴下せず之を開けば掌に水の附着し居るを適度こす。

菌床の作り方　菌床には上面を平にするこ畦狀に中央を高くするものこあり、何れの場合も材料は充分攪拌して糞と敷藁とを均等に混合し灌水して適度の濕分を保たしむ。

平床—木框又は木箱を用ひ或は室の地面に直接栽培する時、何れの場合も先づ最初に床の厚さの３分の１に相當する材料を平に敷き足にて踏み詰め、次に３分の１を其の上に布き充分壓し、最後に殘りの３分の１を以て厚薄硬軟の差なき樣均一に詰め込むべし。鎭壓の程度は人により多少異なれども、人が床上に立てば５—６cm沈下する位を適度こす。詰込の厚さは12cm以上20cm内外たるべし。特設の室以外の木框、木箱等にありては床面の乾燥を防ぐため蓋又は蓆、菰等を以て覆をなすを可こす。床の長さは適宜なるも幅は管理上兩側又は片側より手の屆く範圍卽ち１m内外なるを便利こす。厩肥の詰込量は3.27 m²（１坪）に對し375 kg (100貫)内外たるべし。

畦床—畦床の特徵こする所は床面を畦狀に高く盛りて蕈の發生面積を大にするに在り。畦の高さ及形狀は任意なれごも平床に比し常に濕分を適度に保つこと稍困難なり、又同一面積に對する菌床材料の用量は畦の高低により異なれごも概して平床に比し多量を要す。

種菌　種菌こはマッシュルームの菌糸に對する栽培上の用語にして、栽培上種子用こし特定の取扱をなしたる菌糸の集團なり。現今種菌として用ひらるるものはフレークスポーン、ブリックスポーン純粹培養其儘のもの及野生ヴァージンスポーンの４種あり。普通前２種を用ふ。

（１）　フレークスポーン (Flake spawn)　野生採取菌又は胞子培養菌或は組織培養菌等を普通栽培と同樣の床に栽培し菌糸の普く蔓延したる時之を種菌こして栽培床に移植(下種)するか又は其一部を採り乾燥貯藏し後日の栽培用に供するものなり。

（２）　ブリックスポーン (Brick spawn)　此種菌は其製品が煉瓦狀なるを以て名付けられたるものなり。馬糞、牛糞、切藁、土壤其他を混合し厚板狀に

固め之に前記菌糸を繁殖せしめ、乾燥して貯藏及運搬に便ならしめたるものなり。

（３） 純粋培養其儘のもの 胞子又は組織による純粋菌を培養し培養基と共に栽培用種菌とするものなり。

（４） ヴァージンスポーン (Virgin spawn) 主產地佛國及英國に於ては野生菌の發生せる場所の地表の芝を剝ぎ小溝を穿ち豫め作り置きたる腐熟厩肥を其内に詰め再び芝を原位置に復し置く時は、其附近の菌糸直に之に侵入し來り數週間にして蔓延充塞するを以て、之を直に栽培用に供し又は更に繁殖して大量栽培用に利用す。然れども我が國に在りては野生菌なきを以て此方法によること能はず。

下種—菌床材料を詰込みたる後２—３日にして攝氏35度以上に上昇し後２—３日を經て溫度稍下降し詰込後１週間內外にして攝氏22—23度となりたる時を度とし種菌を下種す。下種用種菌ブリック１坪用なるときは36片、半坪用なるときは18片卽ち１尺平方１片の割合に切斷して充用すべくフレークは一握宛とす。下種の方法は床面所定の場所に深さ4.5cm（１寸５分）の穴を掘り種菌を埋め掘りたる材料を以て再び覆ひ鎭壓し床面を均らし置くべし。

覆土—下種後２—３週間を經過すれば床面に少しく白色の菌糸を認むるを以て此時覆土す。覆土用の用土は人により種々說をなすものあれども當部試驗の結果によれば菌床用土又は堆肥場附近の肥土等有機質を多量に含有するものを用ふれば成績良好なるを認めたり。覆土の厚さは３cm（１寸）を標準とす。覆土用土の濕度は握れば固まり落せば碎くる程度を可とす。

管　理

（１） 濕度—室內及床面は常に適當の濕氣を保たしむるを要す室內空氣の乾燥する場合は灌水して濕度を高め同時に床面の乾燥を防ぐべし室內の濕度は八十度內外を可とす。

（２） 灌水—菌床の乾燥に失するときは菌糸塊（小球體又はピンヘツドとも言ふ）の發生を阻害し表面にピンヘツドを生ぜずして小球體時代には外部

より見ることを得ず發育著しく不良となるものなり。故に適宜灌水して濕氣を與へ發育を助くべし。灌水は未だ蕈の發生せざる間は晴天なれば4—5日に1回位全面に撒水すべく、既に蕈の採收時に入らば可成蕈に灌水せざる樣注意し、如露は細口のものを用ひ水を蕈の中間に灌ぐべし。

收穫 下種より收穫迄の日數は菌床材料、溫度、乾濕等の條件により一樣ならざれども、大體に於て下種後2週間にて覆土せば覆土後40日內外にてピンヘッドの發生を認め約2週間後より收穫を始む。收穫期間は凡そ2箇月に亙るものなり。收穫適期は用途により異なれども普通菌傘下被膜の破れんとする1日前位にして菌傘の表面に少しく鱗片狀のものゝ生じたる時とす。罐詰用其他特に上等品を得んとする時は猶1日前に收穫すべし。

收穫の方法は茸の基部兩側を左手二指にて押へ右手三指にて傘部を輕く挾み捻じ廻せば容易に拔き取ることを得べし。若し此時手荒く取扱ふときは基部の菌床に穴を生じ他の小球の發育を妨げ又は菌柄を折損することあるを以て叮嚀に取扱ふを要す。多數の幼蕈一塊となり、族生せるものは其生長せる1箇を採收せんがため他を犧牲に供することあるを以て其小群中の大部分が生長し收穫適期となりたるとき收穫すべし、此時一、二過大に失するものあるも亦止むを得ざるべし、收穫後は床面の收穫跡に生ぜる小穴に灌水して覆土に用ひたる土を塡充し少しく壓して均らすべし。

採收したる蕈は叮嚀に容器に一列に並べ、冷涼なる場所に貯藏すべし。收穫後長く外氣に曝露するときは表面乾燥し品質を害す。

害　　敵

1 病　　害

（A） 床面に白色絮狀の雜菌を生じマッシュルームの發生を害することあり、當部に於ては此發生を認むるや直に其部分を覆土と共に除去し新に覆土をなす。

（B） 幼蕈の傘上に灌水のかゝりたる時又は高溫にして攝氏22—23度以上に上昇せる時は菌傘の上部に褐色の斑點を生ずることあり、其發生多き時は生長を停止し遂に腐敗することあり、病原明かならざれども一種のバクテリ

ヤなるが如し。之が豫防法としては(イ)灌水の際幼蕈に水の掛からぬ様注意すること(ロ)床面灌水後は室を開放して附着せる水分を早く發散せしむること(ハ)病害激しき場合はクレゾール2—3%液を撒布すれば生育を始めたる蕈は一時全部枯損すれども後却て健全なるものを發育せしめ得べし。

2 鼠　　害

苗床詰込後屢鼠害を被むることあるを以て捕鼠器を用ひ又は其他方法により鼠の驅除を行ふべし。

種菌培養　種菌には前記の如くフレークスポーン、ブリツクスポーン、純粋培養等種々あれども農業部に於て培養する組織培養法を記せば次の如し。

材料—腐葉、腐熟堆肥、馬糞、芝根の腐熟せるもの鋸、麴汁等は何れも培養基として適當と認むれども當部に於ては馬糞の稍新しきものを用ひ廣口硝子瓶中に約八分目位輕く詰め込み綿栓して殺菌す。

殺菌—攝氏百度以上の温度にて2時間宛2回計4時間消毒器に入れ殺菌を行ふ。

接種—菌傘の未だ開かざる蕈を充分洗滌したる後千倍の昇汞水にて蕈の外部を拭ひ消毒せる利刀にて外部を除き内部の肉片を5mm立方位(大豆大)に切斷し其2—3片を培養基を詰めたる瓶の中央部に入れ固く綿栓を施し暗所に靜置する時は、二、三月頃なるときは3—4日にして菌糸を發生し順次繁殖し50—60日を經れば瓶中菌糸を以て充滿するに至る。

貯藏—培養せる種菌は其儘乾燥せる場所に貯藏し置き、十月頃播種用に供することを得れども又乾燥劑を入れたるデシケーター中に瓶のまゝ入れ乾燥貯藏するときは一層良好なり。

增殖—前記種菌は其儘播種用に供し得れども普通の栽培時期より早く九月上旬より用意し馬糞のみの菌床を作り九月下旬乃至十月上旬稍冷涼なる場所を選び箱に詰め1回增殖し十一月盛に繁殖中の菌糸を種菌として用ふる時は成績良好なり。

栽培成績摘要　農業部に於ける栽培成績の概要次の如し。

昭和五年度試作成績

品種名	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
		初	終		重量	箇數	重量	箇數
	年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
ブラウン	5.10.20	6. 1.10	6. 3.12	61	9,636	633	8,410	2,071

備考　菌床材料は馬糞厩肥一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とせり。

昭和六年度品種試驗成績

品種名	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
		初	終		重量	箇數	重量	箇數
	年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
ブラウン	6.12.16	7. 2.18	7. 4.20	62	9,185	381	8.015	1,246
ホワイト	6.12.16	7. 2.14	7. 4.22	68	9,360	664	8.169	2,174
クリーム	6.12.16	7. 3.17	7. 4.17	32	558	46	487	153
興津ブリックホワイト	6.12.16	7. 2.20	7. 4.23	63	6,223	468	5.430	1,532

備考　菌床材料は馬糞厩肥一平方米當 90 kg を用ひ平床箱栽培となせり。

菌床に關する試驗

品種名	試驗別	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
			初	終		重量	箇數	重量	箇數
		年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
ブラウン	平床	6.12.16	7. 2.28	7. 4.23	55	5,633	275	4.917	900
ホワイト	〃	6.12.16	7. 2.12	7. 4.23	71	3,243	255	3.829	799
ブラウン	畦床	6.12.16	7. 2.15	7. 4.21	66	10,489	374	9.155	1,223
ホワイト	〃	6.12.16	7. 2.14	7. 4.23	69	6,258	413	5.462	1,350

備考　菌床材料は何れも馬糞厩肥を用ひ平床は一平方米當厩肥 90kg の割合にて箱栽培とし畦床は幅 90cm 長さ 1.20m の板上に材料を梯形の高畦壟狀に盛り栽培せり。

昭和七年度播種期試驗成績

品種名	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
		初	終		重量	箇數	重量	箇數
	年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
ブラウン	7.11.16	8. 1.21	8. 3.18	57	4,959	323	4.328	1,056
ホワイト	7.11.16	8. 1.24	8. 4. 4	71	11,282	683	9.846	2,236
ホワイト	7.12.15	8. 2.25	8. 4. 6	41	5,358	461	4.677	1,507
ブラウン	7.12.15	8. 2.10	8. 4. 6	56	5,642	285	4.923	934

備考　菌床材料は馬糞厩肥一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とせり。

昭和八年度厩肥材料及硫安使用試驗成績

菌床材料	硫安	品種名	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
				初	終		重量	箇數	重量	箇數
			年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
馬糞	無	ブラウン	8.12.2	9.1.31	9.3.26	55	3,725	207	3.251	677
	//	ホワイト	8.12.2	9.1.16	9.3.26	66	5,500	363	4.800	1,189
	施用	//	8.12.2	9.1.16	9.3.11	55	5,167	438	4.510	1,430
牛糞	無	ブラウン	8.12.2	9.3.10	9.3.22	13	399	16	0.349	51
	//	ホワイト	8.12.2	9.2.24	9.3.26	31	940	44	0.820	144
	施用	//	8.12.2	9.1.12	9.4. 6	85	6,275	473	5.477	1,548

備考　厩肥は一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とし硫安施用區には一平方米當硫安(窒素20%のもの)500g を施用せり。

厩肥詰込量多少に關する試驗

菌床材料	品種名	一平方米詰込量	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
				初	終		重量	箇數	重量	箇數
		kg	年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
馬糞	ブラウン	45	8.11.20	9. 2. 6	9. 3.22	45	1,175	69	1.026	225
	//	90	8.11.20	9. 1.29	9. 3.12	43	3,960	257	3.456	841
	//	135	8.11.20	9. 2.10	9. 3.29	48	7,580	439	6.615	1,436

備考　平床箱栽培とせり。

播種期試驗

品種名	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
		初	終		重量	箇數	重量	箇數
	年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
ブラウン	8.11.20	9. 1.31	9. 4. 6	66	5,452	345	5.087	1,128
〃	8.12.20	9. 2.10	9. 3.23	42	3,773	244	3.292	800
〃	9. 1.22	9. 3.20	9. 3.26	7	462	60	1.108	190
〃	9. 2.17	9. 4.14	四月上中旬高温のため發生せる幼蕈の腐敗せるもの多く、生長充分ならず。					
ホワイト	8. 2.20	9. 1.16	9. 4. 6	81	5,970	505	5.210	1,651
〃	8.12.20	9. 1.31	9. 3.20	49	6,134	492	5.354	1,610
〃	9. 1.22	9. 3.20	9. 4. 9	21	1,774	88	1.548	287
〃	9. 2.17	9. 4.14	四月上中旬高温のため發生せる幼蕈の腐敗せるもの多く、生長充分ならず。					

備考　菌床材料は馬糞廐肥一平方米當 90kg とし平床箱栽培とせり。

畦床栽培試驗

品種名	播種期	收穫期		收穫期間	一平方米收量		坪當收量	
		初	終		重量	箇數	重量	箇數
	年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
ブラウン	8. 12.2	9. 1.20	9. 4. 9	80	6,384	426	5.570	1,396
〃	8.12.20	9. 2.21	9. 4. 4	43	4,617	273	4.029	894
ホワイト	8.12.20	9. 2.24	9. 4.14	50	4,798	347	4.515	1,139

備考　栽培場は堆肥舎壁面に沿ひたる一側を利用し幅 1 m 畦高 25cm とし馬糞廐肥を用ひ栽培せり。

農業部培養種菌栽培試驗

品種名	種菌	播種期	收穫期		收穫期間	1平方米收量		坪當收量	
			初	終		重量	箇數	重量	箇數
		年月日	年月日	年月日	日	g		貫	
ホワイト	八年四月五日當部培養種菌を其儘貯藏せるもの	8.12.21	9.3.22	9.4. 9	19	456	56	0.707	185
〃	前に等しきものを八年十一月一回增殖せるもの	8.12.21	9.2.21	9.3.26	34	3,549	194	3.097	636
〃	八年十一月內地取寄	8.12.21	9.3.21	9.4.14	53	3,858	268	3.367	877

備考　菌床材料は馬糞廐肥一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とせり。

化學的成分　マツシユムールの化學的成分を分析したる成績次の如し。尚主要蔬菜3種の成分を併記して比較す。

種　　名	水　分	蛋白質	脂　肪	炭水化物	灰　分
	%	%	%	%	%
マツシユルーム	88.1	3.5	0.4	6.8	1.2
甘　藍	91.5	1.6	0.3	5.6	1.0
人　蔘	88.2	1.1	0.4	9.3	1.0
菠薐草	92.3	2.1	0.3	3.2	2.1

本試驗調査をなすに當り、常に指導を賜はりたる技師磯永吉博士及助力を與へられたる呂天賜氏に對し感謝の意を表す。